新聞 朝日、09/05/06. 第3種郵便物認可

絵本で手作り劇 好評

女性劇団、時間工面し練習に汗

幼稚園や小学校を回って絵本の世界を演じる劇団が鳥取市にある。「おひさまとあおぞら」。団員は20～40代の女性ばかり10人。それぞれが子育て、PTA活動、仕事などに追われながらも、時間をひねりだして練習に汗を流している。子どもたちの笑顔を見るのが楽しみだから。（下地毅）

けいこに励む今度珠美さん（右）と近藤幸栄さん＝鳥取市富安2丁目の「さざんか会館」

次の公演 9・10日「子どもの笑顔楽しみ」

おひさまとあおぞらは03年5月、鳥取市に住む芝居好きの今度珠美さんと近藤幸栄さんがつくった。これまでに「あらしのよるに」「じごくのそうべえ」「九つの銅貨」など七つの絵本を芝居にし、地元の「わらべ館」や保育園、幼稚園、小学校で40公演近くをこなしてきた。大小の道具づくりや、脚本、演出、音響、照明など、すべてを自分たちでまかなう手作りながら、初演の観客数は800人という人気劇団でもある。

原作はすべて絵本から選ぶ。今度さんは「子どもたちの立体的な想像力を育ててくれるから」と話す。3人の子どもに絵本を読み聞かせた育児経験から、あることに気づいた。絵本をじっと見つめている子どもは、描かれた絵と絵の間に、登場人物が生き生きと動きまわる立体的な世界を頭に思い描いているということだ。

芝居も想像力をかきたてる点で絵本と似ているという。たとえば、舞台には橋のセットしかない。それでも子どもたちは、橋の下に川を、そこに泳ぐワニを、風にざわつく木々を思い浮かべている。

「役者が目の前でつばを飛ばし、汗を流し、泣いて笑うという、テレビや映画では味わえない空気も体験できます」

原作も読んで欲しいので、会場には必ず絵本を置く。

ふだんの練習は週1回。公演の2～3カ月前は週2～3回に増える。2人の子どもを持つ近藤さんは「そろそろ無理かなと思うこともあります」と言いつつ、「劇が終わったときの子どもたちの笑顔。『おもしろかったあ』という言葉。感動して泣く子どもの姿。見るとやめられません」。

次の公演は9日と10日、わらべ館での「ゆらゆらばしのうえで」。追いかけられるウサギと追うキツネが橋の上で友情をつむぐ物語だ。大人500円、高校生以下無料。問い合わせは、わらべ館（0857・22・6262）へ。